

リバーウォークの魅力と創造
 著者：吉川勝秀 鹿島出版会
 2,700円＋税



都市におけるリバーウォークの 必要性を訴えた本

著者の吉川氏は、高知県生まれで東京工業大学大学院修士課程を修了後、建設省(現・国土交通省)へ入省。その後、日本大学教授、慶應大学大学院教授などを務められたが、平成23年9月に悪性リンパ腫で亡くなられた。亡くなられる直前の平成23年4月に発行されたのがこの本。

この中で、吉川氏は、都市で河川を活かし、都市を再生(形成)するうえで、リバーウォーク(川の通路)は必須の装置といえる、と指摘されている。ところが、日本において河川は、都市計画、都市整備の関係者の対象の外にあつたという。一方、都市の水害を防ぐことが河川管理者の主たる対象であり、沿川の都市の土地利用や都市整備は、対象の外であつたのだという。

また、都市計画は地元市区町村によつて行われたが、そこでは国や都道府県の管理する河川についてはいわばアンタツチャブルであつた、という。しかし、河川地主は地元市区町村である」という発想の下で河川を都市計画に含めると、都市計画、都市づくりにおいて河川が活かされる、と吉川氏。

そして、河川を都市・地域に活かす上で、地元市区町村の首長の役割は大きい、とも。『それは、川を都市・市域に活かすという発想、そしてそれを都市計画などの計画に落とす上での役割と、それを実行する行政担当者の支援という面での役割である。自ら構想を持つことも重要だが、行政担当者の構想を受け入れて動かすこと、それを邪魔しないことも重要』という。⑥